

ジョナサン・ノット

多彩な音楽的ヴィジョンが切り開く
東京交響楽団の新時代

松本 學 Manabu Matsumoto
(音楽評論家)

2004年に始まったユベール・スターンの任期が、10年を経ていよいよ満了する。彼の跡を引き継ぐのは、ジョナサン・ノット。スターンよりも18歳若く、50歳を過ぎたばかりの彼は、今まさにあぶらが乗った時期にある指揮者だ。ちなみに同年生まれには、ミンコフスキや、殆ど誕生日も近いパーヴォ・ヤルヴィらがいる。

ノットのこれまでのキャリア

ノットのこれまでのキャリアをおさらいしておこう。1962年12月25日、英国はウェスト・ミッドランズで英国国教会の牧師の息子として生まれた彼は、ケンブリッジ大学で音楽学を専攻、マンチェスターのロイヤル・ノーザン・カレッジでは声楽とフルートを学び、指揮を習ったのはその後のロンドンでのことである。デビューは1988年、トスカーナのバティニャーニ・オペラ・フェスティバルで果たし、翌89年にはフランクフルト歌劇場でカペルマイスターとなった。その後、91年にヘッセン州立劇場の第1カペルマイスター、95～96年は同劇場の暫定首席指揮者にもなっている。97～2002年にはルツェルン劇場の音楽監督兼ルツェルン響首席指揮者(クリスティアン・アルミンの前任者に当たる)を経て、2000年からは現在のバンベルク響の首席指揮者に就任、現在に至る。また2000年にはアンサンブル・アンテルコンタンポラン

(EIC)の音楽監督となり、03年に退いても首席客演指揮者を05年まで続けた。

ノットの最近の活動・活躍

バンベルク交響楽団

言うまでもなくバンベルク交響楽団(バイエルン州立フィルハーモニー管弦楽団)の首席指揮者としての活動が中心を占めている。任期は2度の延長を経て2016年まで締結されており、歴代第2位の長さとなっている(最長はカイルベルト)。着任して3年後には、オーケストラが州立に認められたりと、まさにバンベルク響の新たな黄金時代を代表する存在だ。

さらにバンベルクでは、2004年からマーラー指揮コンクールを創始。これは3年毎に行われるので、今年第4回を迎えたばかりではあるが、第1回にドゥダメルを、また第3回にルビキスを見出したことで存在感を増している。

国際的な音楽祭

ノットの知名度のアップとともに、彼とバンベルク響のコンビは国際的にも著名な音楽祭に招かれるようになってきた。たとえばザルツブルク音楽祭。ノットはまず単独で2003年に初登場し、アンサンブル・モデルン(EM)を指揮。翌04年にはリゲティ&マーラーのプログラムでバンベルク響をザルツブルクにデビューさせている。その後ノットは、2008年



今年75周年を迎えたルツェルン音楽祭での《リング》ツィクルスから《神々の黄昏》(2013年9月4日)

©Lucern Festival / Priska Ketterer

にウィーン・フィルの指揮者としても招待された。

ルツェルン音楽祭でもノットは重要視されている。彼が託されたルツェルンの地で初となる《ニーベルングの指環》一挙上演は、今夏の音楽祭の目玉のひとつでもあったが、ノット&バンベルク響のコンビは、既にこれよりも前の2007年に、同音楽祭の“アルチスト・エトワール”(レジデント)に選ばれていた。ちなみにこの時は、24時間以内に《ラインの黄金》や《アルプス交響曲》などを含む4公演というハードなスケジュールだった。更にノットは09年にもマーラー・ユェグント管を率いて登場。ルツェルン響のシェフだったことも大きく関わっているだろうが、その中でも彼だけが特別待遇されているといつてよい。

今年ルツェルンの前後にも、7月のBBCプロムスや、9月のポンのベートーヴェン音楽祭に登場。来年はケルンのアハト・ブリュッケン音楽祭の他、ウィーンのコツェルトハウスやプラハ、パリ、バーデン=バーデンなどで、様々なプロジェクトが目白押しだ。

レパートリー

ノットの特徴および大きな魅力のひとつはレパートリーにある、と言ってよいと思う。コンテンポラリーのイメージの強い彼だが、それはこの指揮者のほんの一面にしか過ぎない。確かにEICやEMとのコラボなども目立

つし、録音でも同時代物が少なくない。初演作品を指揮することも多く、最近も藤倉大の《secret forest for ensemble》(08)や、ルツェルン響と委嘱した酒井健治の《ネブラス・ニクス》(11)など、邦人作品まで目配りよく手掛けている。

しかし、ノット自身は自分の中心的レパートリーは後期ロマン派だと主張している。ディスクで進められているのはマーラーであるし、コンサートではブルックナーもよく採り上げている。ノットを聴く楽しみは、プログラムの構成にもある。ハイドン、ベートーヴェンから近現代まで守備範囲が広く、その上でたとえば今シーズンもハイドン&バルトーク、シェーンベルク&ベートーヴェン、コルンゴルト&ブルックナーなど、どれも巧みに連関を持たせているように、テーマの設定が知的で隙がなく、絶妙なのだ。

バンベルク響の楽団員たちもノットについて、「もちろんコンテンポラリーも得意だが、後期ロマン派がメインで、歌ものやオペラも大好き。特にワーグナーとか。それにモーツァルトですね」と語っていた。実際に今夏のルツェルンでの《リング》ツィクルスでは、もう好きでたまらないといった様子で、出しうるキュー(指揮の指示)をすべて出しながら、歌詞も殆ど全編歌っているような気合い十分の演奏だった。コンテンポラリーをクールに処理する秀才どころか、ワーグナーに燃

える熱い男=ノットの姿を目の当たりにした。

■ 東京交響楽団との歴史の幕開け

そしていよいよ2014年度シーズンから東京交響楽団の第3代音楽監督として活動が始まる。きっかけとなったのは、2011年10月の客演。この時は、ドビュッシーの《夜想曲》〜〈シレーヌ〉、シェーンベルクのピアノ協奏曲〔独奏:小菅優〕、ラヴェル《ダフニスとクロエ》全曲というプログラムだった。この客演からちょうど1年後の同じ日にシェフ就任が発表されたというのは、たった1度の客演で楽団側にゴーサインを決断させるほどの指揮者であることを表している。

今後ノットは1シーズンに4度来日し、最初のシーズンでは計11回の公演を受け持つ(同一プログラムも含む)。

就任記念に選ばれたのは、武満徹《セレモニアル》とマーラーの第9交響曲だ。92年のサイトウ・キネンのオープニング用に書かれた、その名の通りセレモニー的な前者でノットと東響との新時代の幕開けを飾り、得意のマーラーで一気にスタート・ダッシュをしようという意欲が伝わってくるセレクトである。次のブーレーズと前期ロマン派との組み

合わせや、12月のワーグナーと、ワーグナーからの多くの引用を織り込んだブルックナーの初期交響曲という構成もノットらしい。再来年3月のベルクとワーグナーは互いのロマン性を濃密にして複雑にまとめあげた世界であるし、ヴェーベルン、シューベルト、ブラームスというセットは、ウィーンつながりを意識してのことか。バッハ/ヴェーベルン、藤倉大の新作、ハイドンとブラームスのホ短調交響曲(当時この調性の交響曲は殆どなく、またブラームスが指揮者として演奏した交響曲は、ハイドンのこの1曲のみだという)というのも古典から現代までの“革新性”を俯瞰するような濃い内容だ。どれも、よくぞここまで凝ったものだと感心させられる。

このように見ているだけでもわくわくするラインナップだが、その前に行われる就任直前コンサート、つまり本日の公演も興味深い。ノットの得意なりヒヤルト・シュトラウスゆえ、あの手強いスコアから解像度高く緻密で、かつ響きの美観を存分に活かした演奏を聴かせてくれるだろう。2005年のエジンバラでノット&バンベルク響のイゾルデ役を務めていたブリューワーがソリストというのも楽しみだ。

あたたかでノーブルなサウンドが楽団特有の個性として確立されてきた東京交響楽団であるが、今後ノットの知性と情熱が加わることで、さらに新たな魅力が生み出されてゆくことを願ってやまない。また、ノット自身の成長にも東響が大きく影響を与える、そんな相互的な実り豊かな関係を築いていくことも期待したい。最後に、オペラハウス出身のノットであるから、演奏会形式でも構わないので、ワーグナーやモーツァルト、シュトラウスのオペラなども年に1度か2度のペースで採り上げてもらいたいと付け加えておこう。



▲次期音楽監督就任発表記者会見で(2012年10月10日)